

家庭に於ける中国(支那)の文化

福 井 好 行

昭和44.9.20(土)高松短大家庭教育公開講座に述べたものの補訂である

(1)

世界に於ける一番大きいユーラシア大陸(Eurasia)と一番広い太平洋(Pacific Ocean)との間にある日本は、細長い形をした小さい離れ島で、中国(支那)とは密接な関係があり、現在の輸出入の貿易関係や、マージャン、中華料理や華人僑居の問題は暫く措いても有史以前から深いつながりをもっており、我国は支那中国文化の刺戟・影響を受けて発展して来たのであって、支那は東亜に於ける唯一の文明的大国でありました。

繰返して申しますと、我日本は過去数千年に亘って久しい間仏教・儒教・漢字はもとより、正月の行事から3月上巳、5月5日の端午や七夕の祀り、7月の中元、歳末の除夜の追儺など芸術・政治・制度・学問といわず思想風俗の方面まで、一切の文化各方面に亘って移住して来た多数の帰化人(例えば王仁・阿直岐・阿知使主・都加使主・弓月君など)の他、我が国人にして彼地に渡る者もあり、遣隋使・遣唐使及び留学生・留学僧によって盛んに受け容れられ、弘法大師も東支那海を渡って幾多苦辛の末、都長安に至り、義寧坊にある青龍寺の僧惠果阿闍梨に就いて「真言密教」の秘奥を学んだのでありました。つまり近世になって遠西のイスパニア(西班牙)ポルトガル(葡萄牙)オランダ(和蘭)などヨーロッパの文明諸国と接触するまで、更には明治以後イギリス・フランス・ドイツ・アメリカ等の科学的機械文明が這入るまで、支那中国の文化が、日本文化の母胎であったことは周知の通りで、少なくとも明治27・8年(1894・95)の日清戦争までは、たとえ阿片戦争でイギリスに屈した事があったにしても「眠れる獅子」として日本はおろか欧米諸国からも畏敬されていました。

それが、日清戦争を契機として、支那の国家態勢が整備されていない事が暴露され、沿岸の大切な場所は諸外国に租借されて、自分の国でありながら、外国支配に属するようになり、威海衛はイギリスに、遼東半島はロシアに、膠州湾はドイツに、広州湾はフランスに、何れも99ケ年間、割譲に等しい立場に立たされた。つまり産業革命後の機械文明に圧倒された状態で、イタリーは金門湾を要求してハネつけられたが、一時は「支那分割論」がまじめに論議されたことがあった位でありました。

我日本人の中にも、且ての歴史を忘れて「支那チャンコロ」と呼び之を侮った人々もありましたが、「支那中国の歴史」をまじめにやった人々は漢民族の畏るべき強靱な性質に目をつけて、その侮るべきからざる事を説いて来た方々もありました。堯・舜の頃、黄河の中流域に抬頭した漢民族は、時代がたつにつれ生々発展して、代は代を重ねるにつれ、その領域を拡げて拡大して行き、漢・唐・宋・明・清の盛大を致したのであります。秦の領域を漢が拡張し、漢の領域よりも唐代は遙かに広く、明・清の領地は更に唐時代の区域よりも越えていま

した。恐るべき漢民族の発展は、生々として時代を重ねるにつれ進展して行ったのは顕著な事実であります。

茲で一寸申訳をいたしますが、現在新聞雑誌やラジオ・テレビでは支那中国の事を「中共」呼んでいます。正式には大陸の中華人民共和国、台湾は中華民国に違いありませんのに、私は敢えて支那・支那中国といい、題目にまで「中国（支那）」と書き出してあるのを古臭い、或は又、中国・中共を侮っているのではないかと考える人があるも知れませんが、決して「そうではない」のでありまして、元来中国人自身は「支那」と呼ばれるのを嫌やがっているようではありますが、「支那」というのはその起原は大体次のようなところにあります。

それは漢民族が大いに乱れて周囲の蛮夷民族から侮を受け侵入を繰返された周末の春秋戦国の時代に「秦の始皇」が出て、物の美事に大統一を遂げ、万里の長城を築きなどして諸方面の疆域を拓けたので「秦」の音が訛って china となったと説くマルチン・マルチニー (martin martni) の説が一般に用いられています

尚此他にリヒトホーヘン (Richthofen) の説

漢武帝の時、南ベトナムの地方に東西交通の要衝として日南郡があったが、その日南の名が外国に伝わってシナの語源となったという説、

ラクーペリー (lacouperie) の「支那文化西方起原論」に記された説で西暦230年頃、雲南地方に占據した「滇国」が、ビルマ印度地方と交通して、其名が西方に知られることから起ったという説もある。

英語ではチャイナ、フランス語ではシーヌ、独乙語ではヒナ、ネパール・セイロンではチーンと呼んでいるので、漢とか唐宋、或は元・明・清のように時代が変り、主人公が代っても、支那中国の、国柄として「支那」と呼びつづけられ、漢民族の文化を受け継いだ民族的集団を「支那」と呼ぶのが、内容的にふさわしい、と考えたからで、決して他意があつての事ではありません。

(2)

本論に入りますが、支那中国はユーラシア大陸の東辺に位置して日本に最も近く、高峻な大山脈によって印度・東南アジア・シベリアも明確に遮断され、まとまった大国として此国独自の発展を遂げ、偉大な中国文化を醸成して来たのであります。全面積を見ると実に世界の第3番目の大国でアラスカを含むアメリカ合衆国よりも広いのです。

1番はシベリアを含むロシア「ソ連」、2番目はカナダ、3番が支那で約1千万平方Km（正しくは956万1千平方Km）で、アラスカを含むアメリカ合衆国は936万3千平方Kmで、印度の如きも支那中国のほぼ $\frac{1}{3}$ に過ぎず、日本に至っては37万平方Kmでありますから $\frac{1}{26}$ （支那は日本の26倍）であつて、その支那中国で21省5自治区に分けられているから、概略いうと日本全体が支那の1省に当ると見ても差支ないであります。

人口住民の数の上から云うと（昭和43年5月現在の統計による。）日本の約1億（正確には9,890万）に対して支那は7億2千万で全世界人口の21.2%であり、印度は約5億（4億8千680万）で15%、ソ連は2億3千万で7%、アメリカ合衆国は1億9千700万で5.9%の順に並びます。約言すると、支那は土地は大きく、物の豊かなそして人の多い国なのであります。

支那は北緯N53度の黒龍江省の北部からN15度の海南島の南辺まで、南北4千500Km、東西約5千Km、之に此べると日本は北海道の北端宗谷岬から九州の南端まで細長く2千Kmにしか過

ぎません。よく言われる言葉ですが、「太陽が昇り始めてから全支那中国を照らす迄に 4 時間余りが必要」という事は、如何に国土の大であるかを示すものといえましょう。されば南は熱帯のパナナ・荔枝・マンゴー・竹材から北は寒帯の毛皮針葉樹の産があり、東は海で食塩魚介、海藻があり、西はタクラマカン(Taklamakan)の乾燥盆地があって牧畜果実に恵まれている。中国平原には米・小麦・綿・絹が豊富で、山あり海あり川あり、広大な黄土平原を控えて富強を誇り、求めて得られない物はないのでありまして、漢の則天武後の専権も、唐の玄宗皇帝が楊貴妃を寵愛した開元天宝の政治も、清の聖祖・高宗の偉業栄華も一に此の豊かな物資、潤沢な経済的な裏づけがあったからだと考えられます。

此の恵まれた地大物博の環境に住む漢民族なればこそ、深い矜持と自信を以て「中華」と称し、自らを尊しとして周囲の漢民族以外の者を東夷・西戎・北狄・南蛮と呼んで卑しんだのであります。

(3)

物が豊かなこと、人の多いことは黄土(Löss)の恵みによります。黄土は灰状の粉土で世界中には支那の他、ヨーロッパではライン川の辺り、南ロシアのウクライナ、アメリカミシシッピ川、南米のアルゼンチンのパンパ(Pampas)にも分布していますけれども、その拡がりや厚い層とが民族に与えた影響の大きな点に於いて支那中国に如くものはありません。支那の黄土層は厚いところでは100mに互って所謂華北の地域(特に山西・陝西)に広く分布しており、縦に裂開性をもつ小さな粉土で水を吸上げる力が強く、水を得ただけで肥沃土となるから、施肥の苦勞なくして農業耕作が出来、その生活労働の余裕が文化の発達に向けられたので、そこに世界に誇る漢民族の黄土文化が展開したのであります。

大行山脈の西、山西省や陝西省では壮大な黄土層の中で穴居生活を営む住民も多いようで黄土高原を流れる川は黄濁して水1斗に泥6升の割合になり黄河と呼ばれて海に注ぎ黄海と名づけられています。此の黄河は今渤海湾に注いでいますが、清文宗の咸豊3年(1853——我国では嘉永6年)汴の北の堤が破れ現在の河道に改まったので河南省開封府(汴)の街は河底よりも6m程低いのです。此の例でも判るように度々の河道の変化によって肥沃土黄土が1面に拡がって農耕に豊かさを与えたので、支那文化は一に黄土によったものとも見られるわけで、此のため漢民族は黄色を貴ぶこと非常なもので、国の色、民族の色として黄色を重んじ、支那中国の歴史の始まりは黄帝に始まると云っています。現に司馬遷(BC145—Bc86)が書いた(史記)は筆を黄帝に起し黄帝を以て開卷第一に置いてあり、夏・殷・周から秦漢の君主に至るまで皆黄帝の子孫と伝えられている。これは恰も日本の始まりは伊弉諾尊・伊弉冊尊に始まるという如きもので、東は蒼を配し、西は白、南は朱、北は玄とし漢民族自らは、世界天下の中心であるから中華であるとして黄色を配したのである。

東は海原であるから蒼、西は砂漠で乾燥蒸発が甚しくアルカリの白砂が続いたから白、南は太陽の熱気酷しく朱を、北は諸色の約る所として玄を配したということです。

(4)

この恵まれた中華の土地を産み哺んでくれたのは天である。天が万物を育成してくれたので、凡ての物の主は「天」であると信じたのです。

この考え方は日本にも伝わり、現在我国の神様のお祈り儀式に、最初の行事として神主が

「オ——」と称える降神の儀——祈りの庭に天の神様が天下って来る。そこで山の物・野の物海の物・山幸海幸種々の物を御供えして祝詞を捧げ、お祈りして最後に祭の庭に天降った神様が天に帰られる「昇神の儀」オ——と重々しく厳やかに唱えるのも此の思想に基づくもので、早魃に際して雨乞いの為、山の巔まで火を燃やすのも、天に最も近く天上の神に祈ると、よく判る場所という意味であります。

ところが、天は形なく、言葉や動作を示して人々を指揮統治する事は出来ません。そこで、天に代って天の代理となって、人々を率い指導する天の子、即ち天子を多勢の人の中から選び出して、主宰者、或は統治者として、人々の声を聞いて政治をするのでありまして即ち王という文字は一（天）と一（地）と、その間に生きる人民を結びつける縦の一線——つまり天の意志を地上に下して人に施す役が王なのでありまして、皇は白、白熱する太陽を示し、王より一層強力なことを意味しています。

孝行者が出るとか、天を祈る祭天の儀式が盛んに行なわれると、白鹿・鳳凰が顯われて目出度い気持を表わしました。が反対に暴風雨・早魃・洪水が起るのは天のしわざで、政治が乱れると天災地変がふえる。政治が悪く、人民が苦しむと雷雨・饑饉が起って戒めを下すのであります。即ち、君であっても暴政を行い人心を失うとそれはもはや天命から見放されて君でなくなる、臣下の者でも人心を得るような仁徳のある者は天命を受け、天に代って討伐を行ってもよいと考えられた。禹が9年に互る黄河の氾濫を治めて舜の譲りを受け、夏の国を建て、湯王が夏の桀王を打倒して殷を開いたこと、武王が殷の紂王を討って周を建てたこと、周末乱れて秦の始皇が代り、漢・王莽の新・後漢・南北朝・隋・唐・5代・宋・元・明・清と革命が続いて行なわれたのです。「天命革れり」これが革命で、現在中共の文化大革命も、「破旧」・立新」文人官僚の支配を否定して

1. 肉体労働と頭脳労働の一体化
2. 報酬・賃銀の平均化
3. 幹部の生産労働への参加

を求めて永い因襲にとわれた保守的な中国の文明を科学的で合理的な文化に革めようとする運動であります。

そこで話がもとにかえりますが、天を祈る儀式は、天の直系の代表者天子の特権であり、天命を受け、天の子として天下を支配する天子にとって祭天の儀式は天子の義務であると考えられたのです。天子即位の始めは山東省の泰山に登り、天を祈る祭天の儀式を行い、毎年12月22日の冬至の日には北京の天壇に登臨して祭天の儀式を行なった。正に徳治主義の世界帝国を象徴する極めて荘厳重大な礼を示したものであります。恰も日本に於いても天子即位の始めに大嘗祭を行い毎年10月17日には神嘗祭を、11月23日には新嘗祭を行うようなものであります。

序に申添えると、この泰山（1545m）は日本の阿蘇山が1592mであるから相似た高さで、塩江の南に当る龍王山が1057mで泰山より少々低い。この泰山は黄河平原を旅する者にとっては恰好の目じるしとなった。夜旅する者は北斗7星の中心となる北極星が指針となるので、学問の道を歩む者は権威ある大学者を泰山北斗と仰いで指針とした。これが「秦斗」の語の起る所以であります。

又話が横道に外れたので本筋に戻しますが、革命が繰返される世の中において2代3代と自分の子孫に王位・皇帝の位を継がせてやろうとするのは、支那の君主に限らず、人情の常

です。そこで、天子は天の代理者として北極星の如く永久不動のもの、万物流転の世の中において千古動かざるもの、侵すべからざるものとし、天の代理者として北極星の如く永久に変わらぬ天下の中心という思想考えを広く一般の民衆に知らせ、深く人々の心の底に刻む込んで置く必要がありました。北を玄（色の綜合帰結したもの）とした所以で、そこに北は尊貴の極という思想が生ずるものであります。

(5)

されば天子はいつも北の極に位置して南面して政治を行い、之に仕える臣下は北面して仕えたのです。これは我国の平安時代、朝廷に仕え侍う武士に「北面の武士」があったこともここから生じたわけで、北上、南下の語の起原も全様であります。京都では今でも、4条上ル3条下ルなど、上ル下ルの語を使いますが「上ル」とは北へ、下ルとは南への意味であります。

京都御所の紫宸殿も南面しており、階段は南の庭にかかっています。左近の桜・右近の橘（柑子の1種でしょう）内裏ビナの左近右近も天子から御覧になっての呼称で、京都平安神宮（大極殿の規模を縮小、模したもの）にも左近の桜・右近の橘があり、赤い柱に白い壁、それに蒼い瓦は優美な平安朝の面影を留めています。その蒼龍樓は東の高殿で西の高殿を白虎樓といいます。

貴きは北にあり、そして南を向いていることは神社や寺院にも見られます。大和の法隆寺や、奈良東大寺大佛殿も南面しているので南大門が正門です。興福寺も南は猿沢池で・3条上^{ボリ}り大路の北側に南大門趾があること御承知の方も多いと存じます。洛陽長安の都城の制に倣った我日本の奈良平安の都市造りも内裏（宮城・皇城）は北の中央にあって南を向いた正門（朱雀門）から南に向う大路を朱雀大街（日本では朱雀大路）といい、その羅城に達するところに羅城門（謡曲では羅生門）があります。

以上述べたように、この君子南面の思想は日本に伝わって奈良時代国々に建てられた国分寺・国分尼寺や、国毎に設けられた式内社は何れも南面して立つと考えられています。つまり、南面する神社や寺は平安時代の古いものと鑑定してまず間違いないと思います。私の郷里阿波に於ては、「南向きの家でないと出世せん」といわれています。思うに北半球では、南正面から日光を受け、日当たりがよいので、北に座して日光を浴びることに人々が憧れ、理想としたからであります。

(6)

君は北に座して政事を執り、之に仕える臣下は北面して従った。君は厳然として君たり、仕える臣は臣下として礼節を盡し、茲に君臣の別明らかに定ったのであります。君君たり、臣、臣たり。父、父たり、子、子たり、君臣父子の別、明らかに立って国家の秩序が保れたわけであります。尊きを尊しとし、親を親として国家社会は治まるのであります。

この支那の思想は海の東の島国日本に結集して日本の盛大を致したので、上下左右の別明らかに区別されて道德の基礎となったのであります。

そこえ、明治以後急激に機械化された西洋文明が入って来て合理的で科学的能率的な機械の利用発達頗る目ざましく、そのかげにはややもすると人間が機械にふり廻される感がないでもありません。

研 究 紀 要

創 刊 号

高 松 短 期 大 学